



TITLE:

舊東京天分臺:五十餘年の功績を昔語りに持て餘された殘骸

AUTHOR(S):

CITATION:

舊東京天分臺:五十餘年の功績を昔語りに持て餘された殘骸. 天界
1929, 9(102): 452-452

ISSUE DATE:

1929-08-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/161460>

RIGHT:

調べを忘れてはならない。

日蝕當日の事は後廻しにして、乾板の成果其のものについて少しつけ加へておきたい。使用した乾板には特別製のものはなく、普通の商品乾板しか手に入らなかつたのであるが、其れでも數年前に比し幾種もの新式の乾板、特に高速度のものが手に入つた。乾板を選択するにやゝもすれば保守的になり易いものであつて、新しい種類のものには躊躇し勝ちであるが、撮影乾板の種類を調べて見るに、比較的良好な乾板の殆んど全部が新しい高速乾板であつた事は注意すべき事である。若し 20 年前に今度の様な雲に妨けられた日蝕に出會つたなれば、美しい日蝕の寫眞は多分得られなかつたに相違ない。少なくとも乾板の改良によつて我々は二十年前に比して、日蝕其のものゝ時間を 2—3 倍に引延し得ただけの効果があつたのである。高速乾板は銀粒が荒いといふ缺點はあるが、用途によつては差支へなき事である。（最近の雑誌によるミフィリピン島の英國の觀測隊では僅かのシラスを通して赤外線乾板では其の害を受けなかつたそうである。京都隊の使つた全色乾板も可なり雲に打勝つて居る。）

舊東京天文臺

五十餘年の功績を昔語りに持て餘された殘蹟

廢墟の如き麻布飯倉の舊東京天文臺は新天文臺が三鷹村に建設されてから殆ど不用となり帝大及文部當局者はこれの處分に就て種々研究を重ねたが目下殆ど持餘しの状態にあり關係者も困り果てゝ居る現在東京天文臺は僅かに帝大理學部天文科生徒七八名の實驗觀測所として使用するに過ぎず壁は落ち天井は破れ雜草は伸びるにまかせて訪れる者をして一種の怪奇的感情を起さしむる程荒廢して居るが同天文臺は海軍觀象臺から内務省地理局となり明治二十一年に帝大理學部星學教室となつて過去五十年以上の歴史を持つ實に我國天文學發達の地と言へる右につき帝大理學部及び營繕課を訪へば語る

麻布の東京天文臺はラヂオ、建物、惡空氣等の障害を受けて最早天體觀測が困難である上本校より遠く離れてゐるので學生の授業にも不便で早晚適當の方法を講じたい考へですが繰延で其のまゝとなつて居りますあの敷地を賣れば六七十萬圓は浮ぶでせうがねえ云々。（或る新聞より）